

令和3年度教育実習についての現状と課題

令和3年度 長崎大学教育学部教育実習委員会
加納暁子* 駒津順子* 前田桂子* 久保田もか* 小西祐馬*
宮下 茂*/**
(*長崎大学教育学部 **教育実習委員会委員長)

1. はじめに

本報告書は、本学部教員養成課程の3年生を対象として、令和3年度教育実習委員会が実施したアンケート調査結果を基に、各校種の主免実習の事前から事後における教員志望の意識の変化に重点をおき、教育実習と教員志望の関係性について考察・分析を試みたものである。

2. 本学における実習指導体制の現状とアンケート調査方法について

本学部では、教育実習における大学教員の指導体制を強化するために、教育実習サポート参観システムを運営している。教育実習サポート参観システムでは、附属小学校、附属中学校、附属幼稚園及び附属特別支援学校の主免実習に、各コースの担当教員に加え、実習委員を含む大学教員等が参観し、実習生に対する指導助言を行うほか、事前・事後アンケートを行っている。

令和3年度の教育実習サポート参観システムでは、新型コロナウイルス感染予防の見地から附属学校園への入場制限を設け、直接の指導教員等、3名の教職アドバイザーの巡回及びカウンセリングによって、限定した訪問指導が行われた。主免実習における附属小学校への参観延べ人数(内数)は、昨年度の116名(教授12名、准教授14名、助教0名)から75名(教授23名、准教授52名、助教0名)へ、附属中学校へは102名(教授11名、准教授19名、助教5名)から92名(教授40名、准教授51名、助教1名)と参観者数が減少している。

年々減少傾向にある、学部教員による参観であるが、その要因として、全国的な新型コロナウイルス感染継続が大きく関係している。附属学校園においても新型コロナウイルス感染予防の観点から、校内入校者数を制限するなどがあり、教育実習サポート参観システムとしても、大学教員の教育実習指導において、直接の担当学生への参観指導に限るなど、制限をかけざるを得なかったことにある。今後の新型コロナウイルスの感染状況の改善に期待し、次年度の教育実習サポート参観システムが充実することが望まれる。

3. 各校種における実習アンケート結果に基づいた分析と考察

以下に、各校種のアンケート結果と分析・考察を示す。なお、実施したアンケートには、①校種別に設問が異なる部分があること ②実習回数のみを問う設問

等の考察は難しいこと ③設問毎に有効回答数に相違がある場合が見受けられることから、アンケートの事前から事後における教員志望の意識の変化に重点をおいた分析・考察に統一している。

3.1【幼稚園】令和3年度主免実習（幼稚園）学生アンケートの結果の分析と考察

令和3年度の幼稚園主免実習を行った学生は26人であり、配属学年の内訳は、年少10人、年中6人、年長10人であった。

教職への志望意識についての質問に対する回答は、表1のとおりである。実習前に思案中としていた学生が実習後にほぼ半分に分かれた形になるが、実習後の教職志望の意思は少し高まっている。

教育実習における心身の準備（メンタル・体調など）についての質問に対する回答は、表2のとおりである。実習の前後を比較すると、実習後の方がより自信を持って心身の準備を行うことが出来たと感じている人数が増加している。

教育実習における授業の準備（指導案）についての質問に対する回答は、表3のとおりである。また、授業の準備（教材）についての質問に対する回答は、表4のとおりである。実習の前後を比較すると、指導案や教材の準備に関して、学生は実習前にはあまり取り組めないものの、実習を通して取り組めるようになる傾向が見られる。

実習期間中について、以下の①から⑭の質問（全主免実習項目共通）がなされた。それらの回答は、表5のとおりである。

①子どもに積極的に関わることができたか ②謙虚な態度で担当教員の指導や他の実習生の意見を聞くことができたか ③子どもの言動を理解し共感することができたか ④担当教員や実習生の意図を共有して指導（支援）にあたることができたか ⑤日録での客観的記録作成と今後の指導（支援）方法の記述をすることができたか ⑥授業（保育）の目標（ねらい）を明確にした上で指導計画を立て、具体的な指導内容、方法や配慮事項を工夫することができたか ⑦授業（保育）の山場をおさえ、思考（発想）を促す発問（ことばかけ）をすることができたか ⑧子どもの実態や活動に応じて適切な時間配分をすることができたか ⑨教師として個々の子どもに応じた適切な話し方や指名の仕方を身につけることができたか ⑩丁寧でわかりやすい環境構成（教材づくり）をすることができたか ⑪学級集団の指導（クラス集団づくり）に計画的に取り組むことができたか ⑫授業（保育）での反省点を生かし、より良い授業（保育）実践づくりをすることができたか ⑬授業（保育）や反省会に視点をもって参加し、より良い授業を目指して意見を述べることができたか ⑭社会人としてのマナー（服装、言動、時間管理、報告・連絡・相談）を守ることができたか

表5の回答では、「できた」または「どちらかと言えばできた」と肯定的に捉えている実習生が多かったが、⑦、⑧、⑩、⑪については、「どちらかと言えばできなかった」と否定的に捉えている実習生もいることがわかる。

自己評価に関わる、実習で必要となる教員としての基礎・基本的知識・技能が

どの程度あるかの質問に対する回答は、表6のとおりである。実習前後で全くの同数であり、否定的に捉えている人数がやや多いといえる。一方で、教育実習を経験して、教員としての自分の指導力をどのように感じたかの質問に対する回答は、表7のとおりである。回答結果から、実習が教員としての自分の指導力不足を知る機会にもなっていると考えられる。

事前相談に関する、大学教職員や教職アドバイザー及び附属教員へ事前に相談を考えたかの質問に対する回答は、表8のとおりである。施設の利用状況について、附属幼稚園の利用時間は基本的には17時までであるが、事前に申し出れば18時まで可能であった。休日の授業準備や他の実習生との打ち合わせは、集まらずに自宅、もしくはLINEやZoomを活用したという回答が多数であった。

3.1.1 総括

教職への志望意識は、実習前よりも実習後にやや高まっている傾向が見られた。また、指導案や教材の準備に対して、実習前にはあまり取り組めないものの、実習開始後には取り組めるようになる傾向が見られたことから、実習が実践的な学びを保障する機会になったと言える。自身の教員としての基礎・基本的知識・技能や指導力に対して、否定的に捉えている人数が多いが、これは新たな課題を見出しているものと思われる。実習において子どもの遊びの実態や、附属教員の子どもへの援助を直接学ぶことにより、子どもへの言葉かけ、環境構成などの更なる課題を見出している学生が多かったため、実習後の大学での学びに反映させていく必要性がある。

表1. 教職への志望意識について (人数)

	事前	事後
強く希望	5	7
希望	9	望んでる
思案中	7	どちらかといえば望んでいる
あまり希望しない	4	どちらかといえば望んでいない
まったく希望しない	1	望んでいない

表2. 心身の準備について (人数)

	事前	事後
できた	3	12
どちらかというときできた	20	11
どちらかというときできなかった	2	2
できなかった	1	1

表3. 授業の準備【指導案】(人数)

	事前	事後
できた	0	17
どちらかというときできた	8	7
どちらかというときできなかった	11	1
できなかった	7	1

表4. 授業の準備【教材】(人数)

	事前	事後
できた	0	13
どちらかというときできた	8	11
どちらかというときできなかった	12	1
できなかった	6	1

表5. 実習期間中の質問 (人数)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
できた	19	22	8	9	7	4	4	4	8	3	6	8	15	18
どちらかというときできた	7	4	17	16	16	20	14	14	17	16	11	15	9	6
どちらかというときできなかった	0	0	1	1	3	2	8	8	1	7	9	3	2	2
できなかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表6. 基礎・基本的知識・技能 (人数)

	事前	事後
十分ある	1	1
かなりある	7	7
あまりない	18	18
ない	0	0

表7. 指導力について (人数)

	事後
十分ある	2
かなりある	3
あまりない	21
ない	0

表8. 事前相談について (人数)

	事前
相談した	0
したくてもできなかった	2
必要なかった	24

3.2【小学校】令和3年度主免実習(小学校)学生アンケートの結果の分析と考察

令和3年度の小学校主免実習を行った学生は108人であり、配属学年の内訳は、小学校1年生16人、2年生15人、3年生15人、4年生16人、5年生15人、6年

生 16 人，複式 1・2 年生 5 人，複式 3・4 年生 5 人，複式 5・6 年生 5 人であった。

教職への志望意識についての質問に対する回答は，表 9 のとおりである。質問肢の形式が事前・事後で異なるが，実習の前後を比較すると，「望んでいる」または「どちらかと言えば望んでいる」の項目に対し，事前の 64.7%から事後の 79.0%へ変化がみられた。一方で，「望んでいない」または「どちらかと言えば望んでいない」についても，事前の 12.0%から事後の 21.0%へと変化がみられる。

今回の実習で一番印象に残ったことに関する質問では，前向きな意見の具体的な内容として，「元々教員は大変そうな仕事だと感じていたが，実際に教員の立場になってみて教員の素晴らしさを実感できた。」，「率直に、難しかったです。しかし，そこに『学びを追究する』魅力を感じました。」などがあげられた。感想や率直な意見は，全体的な要約から以下の通りの傾向がみられた。「一つの授業に対する準備の大切さを改めて実感しました。子どもがいることが学校へ行くモチベーションになりました。もっと他の先生の授業をみて，学びたかった。授業は学べば学ぶほど奥が深いことが分かった。授業にはたくさんの工夫が詰め込まれていました。子どもの立場に立って考えることが大事だと思った。反面，成長に対する強い喜びを得ることができるとわかった。教材研究は想像以上に大変であると感じました。こどもの『やりたい』という気持ちを大切にしていると感じた。授業がどういうものがプロの技を目の当たりにすることができた。」*

教育実習における心身の準備（メンタル・体調など）についての質問に対する回答は，表 10 のとおりである。令和 3 年度は，中学校の副免実習を 5 月に履修している学生も多く，令和元年以前と同様にプラスの効果がみられた。具体的には，「副免実習の時に 2 週間で 6 本授業をして，少し自信がついたので，不安よりも楽しみややるぞという気持ち大きい。」，「副免実習を経験していることに加え，緊張や不安を感じても実習が始まれば改善されると思っているから。」などの回答がみられた。更に，「規則正しい生活を心がけた」，「早寝早起き，メンタル強化」 「実習に対する不安もコロナに対する不安もあるが，ある程度自分の中で折り合いを付けることが出来てきたため，精神面の調整は出来てきた。体調は手洗い，外出時のマスク着用の徹底，アルコール除菌，などを行っており今まで特に体調の変化はない。」等の回答から，実習に対する体調管理の基本を実行し，感染症への対策も意識されたことが伺える。

教育実習における授業の準備（指導案）についての質問に対する回答は，表 11 のとおりである。また，授業の準備（教材）についての質問に対する回答は，表 12 のとおりである。指導案や教材の準備は，実習の前後を比較すると，実習前にはどちらかと言えば取り組んでいるが最も多いが，実習期間中には取り組むことが出来たとの回答へ変化している。特に教材の準備には事前の 2 名から 41 名へと，実習中の取り組みとして大きく変化，令和 2 年度の状況と同じ傾向が見られた。

実習期間中について，①から⑭の質問（全主免実習項目共通）がなされた。そ

これらの回答は、表 13 のとおりである。

表 13 の回答では、「できた」または「どちらかと言えばできた」と肯定的に捉えている実習生が多かった。一方で、やや否定的に捉えている項目は、⑦授業の山場をおさえ、思考（発想）を促す発問や、⑧子どもの実態や活動に応じた適切な時間配分、⑩学級集団の指導（クラス集団づくり）に計画的に取り組むことなどについては、「どちらかと言えばできなかった」であった。この 3 点については、令和 2 年度でも同様の傾向がみられている。

自己評価に関わる、実習で必要となる教員としての基礎・基本的知識・技能がどの程度あるかの質問に対する回答は、表 14 のとおりである。実習の前後を比較すると、実習前は否定的に捉えている実習生は多いが、実習後には肯定的に捉えている実習生が多くなっている。このことから、実習が実習生自身の教員としての、基礎・基本的知識・技能を計ることができる良い機会となったことが考えられる。また、事前の設問として、実習先の学校へ教育実習に期待することについては、全体的な要約から以下の通りの傾向がみられた。「授業力の向上と、子どもたちとの関わり方。児童との具体的な関わり方について学ぶこと。生徒との関わり方や授業について学びたい。自分自身の成長、子どもとの関わり方を知る。子どもたちとの関わりを大切にしたい。実りある授業づくりを学び、実践すること。子どもと関わる以外の仕事についても知りたい。子どもとの関わり方発問の仕方教材研究について。コロナ禍でも有意義な実習になること。プロの教師としての関わり方をみたいです。」*

3.2.1 総括

令和 3 年度は、2 年目となる新型コロナウイルス対策下の実習が行われた。令和元年度以前と同様に、5 月の副免実習後の 8 月開始の主免実習実施となった。また、令和 2 年度の大学における感染症の状況下を過ごした経験からも、主免実習に対して体調管理も含め準備や心構えを具体的な行動として模索しながら対応していた様子が窺える。感染症の状況下においても、対面授業での指導法を取り入れながら、授業づくりの工夫を行う中で、授業の準備・練習段階における黒板使用が可能な環境の整備も、今後重要な視点である。実習に対する率直な感想として、「教師として社会人としてのやりがいを、身をもって知ることが出来た。」という学生の熱意があげられた。これを実現するためにも、附属学校と大学教職員、教職アドバイザーの連携について、学生個人のニーズに対しても、役割分担により寄り添う体制の確立が、どのような状況においても重要であると改めて確認できる。

表 9. 教職への志望意識について (人数)

	事前	事後
強く希望	14	40
希望	52	39
思案中	24	14
あまり希望しない	6	7
まったく希望しない	6	7

表 10. 心身の準備について (人数)

	事前	事後
できた	21	33
どちらかというときできた	60	55
どちらかというときできなかった	20	10
できなかった	1	2

表 11. 授業の準備【指導案】(人数)

	事前	事後
できた	18	32
どちらかというときできた	70	58
どちらかというときできなかった	13	10
できなかった	1	0

表 12. 授業の準備【教材】(人数)

	事前	事後
できた	2	41
どちらかというときできた	45	49
どちらかというときできなかった	48	8
できなかった	7	2

表 13. 実習期間中の質問 (人数)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
できた	67	80	44	42	29	23	15	16	25	24	14	31	40	64
どちらかというときできた	32	20	52	53	59	69	56	47	64	62	63	63	56	35
どちらかというときできなかった	1	0	4	5	12	8	29	32	11	14	21	6	4	0
できなかった	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	2	0	0	1

表 14. 基礎・基本的知識・技能 (人数)

	事前	事後
十分ある	2	1
かなりある	20	25
あまりない	79	72
ない	1	2

表 15. 指導力について (人数)

	事後
十分ある	2
かなりある	25
あまりない	68
ない	5

表 16. 事前相談について (人数)

	事前
相談した	7
したくてもできなかった	16
必要なかった	79

*部分の要約は「UserLocal AI テキストマイニング (<https://textmining.userlocal.jp/>)」を使用。

3.3【中学校】令和3年主免実習(中学校)学生アンケートの結果の分析と考察

令和3年度の中学校主免実習を行った学生は75人であり、配属学年の内訳は、1年生26人、2年生27人、3年生22人であった。専攻教科の内訳は、国語12人、社会8人、数学9人、理科10人、英語8人、保健体育7人、技術4人、音楽6人、美術5人、家庭6人である。

教職への志望意識についての質問に対する回答は、表17のとおりである。実習前に教職を「強く希望している」と回答した学生は17名、「希望している」は32名で49名の学生が教職を望んでいるのに対し、「思案中」が15名、「あまり希望していない」または「全く希望していない」学生は11名であった。事後アンケートでは事前アンケートとの選択肢が異なっているので単純に比較できないが、事前アンケートで「思案中」と回答した15名が教職を「望んでいる」または「望んでいない」にちょうど二つに分かれ、事前と事後で大きな変化は見られなかった。

教育実習における心身の準備(メンタル・体調など)についての質問に対する回答は、表18のとおりである。実習後には「できた」という明確な回答が11名も増え、実習前よりも実習後の方がプラスに転じたことが分かる。

教育実習における授業の準備(指導案)についての質問への回答は、表19のとおりである。また、授業の準備(教材)についての質問に対する回答は、表20のとおりである。実習の前後を比較すると、指導案、教材の準備ともに、事前に尋ねた場合より事後の方が、明確に「できた」という回答が大きく増加した。

自己評価に関わる、実習で必要となる教員としての基礎・基本的知識・技能がどの程度あるかの質問に対する回答は、表21のとおりである。また、教育実習を体験して、教員としての自分の指導力をどのように感じたかの質問に対する回答は、表22のとおりである。技能に関しては、事後アンケートで「ある」または「かなりある」と答えた学生が14名おり、事前10名より増加しているが、「ない」ま

たは「あまりない」と答えた学生 59 名いて、78.7%に上る。また、表 22 の指導力についても、75 名中 56 名 (74.7%) が「あまりない」または「ない」と答えている。自由記述からも、教員としての技能や指導力について、課題を感じたようであった。

実習期間中について、①から⑭の質問（全主免実習項目共通）がなされた。それらの回答は表 23 のとおりである。

質問項目の①～⑥は実習の取組の姿勢を問う項目である。また、⑪～⑭は積極性、マナー、意欲に関する質問であるが、これらはいずれも高い比率で満足であったが、①と⑪の子どもの積極的な関わりが規制されていた関係もあったのか、他と比較して低い数値となった。⑦～⑩は時間配分や話し方などの、技能を問う質問である。この面については比較的満足度が低く、今後の課題と考えている実習生が多かった。

授業準備の時間や場所に関する質問に関しては、コロナ禍の実習であったことから、実習後、放課後や休日の授業準備や打合せはほとんどの学生が自宅で一人で行うか、またはオンラインで行ったということが分かった。

3.3.1 総括

以上のアンケート結果より、教職希望者の数は消極的志望を含め、実習前後でほぼ変化はなかった。例年であれば、事前より事後の方が、実習を体験したことでモチベーションの上昇が見られるが、今年の実習は期間が短縮された上に生徒との関わりも薄かったことが影響しているのではないかと考える。また、今年初となるオンライン期間中の実習を体験し、様々な課題に直面しながらも GIGA スクール構想に対応する機会を得て、例年とは異なる面で学びの多い実習となったのではないかと考えられる。

表 17. 教職への志望意識について (人数)

	事前	事後
強く希望	17	
希望	32	望んでる 36
思案中	15	どちらかといえば望んでいる 21
あまり希望しない	7	どちらかといえば望んでいない 11
まったく希望しない	4	望んでいない 7

表 18. 心身の準備について (人数)

	事前	事後
できた	16	27
どちらかというときできた	44	34
どちらかというときできなかった	10	12
できなかった	5	2

表 19. 授業の準備【指導案】(人数)

	事前	事後
できた	12	34
どちらかというときできた	51	29
どちらかというときできなかった	12	10
できなかった	0	2

表 20. 授業の準備【教材】(人数)

	事前	事後
できた	3	33
どちらかというときできた	37	34
どちらかというときできなかった	28	5
できなかった	7	3

表 23. 実習期間中の質問 (人数)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
できた	15	54	34	28	22	17	7	11	15	11	8	30	40	49
どちらかというときできた	36	17	36	41	41	47	44	30	44	51	28	39	34	22
どちらかというときできなかった	21	4	4	6	12	10	23	29	15	12	36	5	1	4
できなかった	3	0	1	0	0	1	1	5	1	1	3	1	0	0

表 21. 基礎・基本的知識・技能 (人数)

	事前	事後
十分ある	0	2
かなりある	10	14
あまりない	63	54
ない	2	5

表 22. 指導力について (人数)

	事後
十分ある	2
かなりある	17
あまりない	47
ない	9

表 24. 事前相談について (人数)

	事前
相談した	9
したくてもできなかった	8
必要なかった	58

3.4【特別支援】令和2年主免実習（特別支援）学生アンケートの結果の分析と考察

令和3年度の特別支援主免実習を行った学生は16名であり、配属学年の内訳は、小学部5名、中学部5名、高等部6名であった。

教職への志望意識についての質問に対する回答は、表25のとおりである。実習の前後を比較しても変化はほぼなく、16名中12名が教職への就職を志望し、4名が希望していなかった。希望していない理由としては、「大学院等に進みたいから」が2名、「入学当初から」が1名、「その他」が1名であった。「職業として、教員（教職）に対する魅力を感じましたか？」についても16名中15名が「はい」と回答しており、多くの学生にとって、充実した実習であったと判断できる。

教育実習における心身の準備（メンタル・体調など）についての質問に対する回答は表26、教育実習における授業の準備（指導案）についての質問に対する回答は表27、授業の準備（教材）についての質問に対する回答は表28のとおりである。

心身の準備について、事前で「できなかった」または「どちらかというところできなかった」という3名の回答理由は、「緊張が日に日に増しているからです。（生理前で抑うつ傾向も出ているのもあると思います。）」、「規則正しい生活リズムを作ることができなかったから。」、「健康面は特に問題ない。メンタルに関しては、コロナへの不安等はあるが、現時点では大丈夫。」であった。授業の準備について、事前に多くの学生ができていないと回答しているが、元来、実習期間中に指導を受けることから、学生の準備不足とは考えられない。その裏付けとして、事後においては全員が指導案・教材において「できた」または「どちらかと言えばできた」と回答している。

事後アンケートにおいて、以下の①から⑭の質問（全主免実習項目共通）がなされた。それらの回答は表29のとおりである。

全体的に「できた」「どちらかと言えばできた」が大半を占める結果とであった。「できなかった」という回答は⑦に一つあるのみである。「どちらかと言えばできなかった」が選択されたのは、①⑩⑬⑭に1名ずつ、⑤⑦⑨⑪に2名ずつ、③に3名、⑧に4名であった。基本的な教育実践については、おおむね「できた」との自己評価がなされている。

実習で必要となる教員としての基礎・基本的知識・技能がどの程度あるかの質問に対する回答は表30、教育実習を体験して教員としての自分の指導力をどのように感じたかの質問に対する回答は表31のとおりである。

自己評価の質問に対して、変化がなかった学生は、知識・技能不足や視野の狭さを痛感しているが、それらの学生も「子どもたちの見方が自分の中で大きく変わった。子どもたちと自然に話せるようになったし、子どもたちの方からも自然に話しかけたり遊ぼうと言ってくれるようになった」といった前向きな思いを持っている。好転した学生も含め、より具体的・実践的な反省点に気づき、学ぶ気持ちの大切さ、謙虚さ等といった、教員としての知識・技能の重要性について実感

しており、有意義な実習だったことがうかがえる。そして、事後の自己評価の質問への回答結果から、主免実習では、充実した経験ができたと判断している一方で、自身の教師としての能力には、更に課題が多いと捉える傾向があると言える。また、全ての主免実習生が課題に応じて学びを深めたいと考えていることが読み取れ、実習に行ったからこそ、知りたいことや調べたいことができたと言われている。

3.4.1 総括

以上のことから、主免実習は有意義であったと言える。コロナ禍の中で十分な授業準備ができなかった面もあったが、不足している部分は実習中に指導を受け、丁寧なサポートのもとで不安は解消されていた。教員との協力体制が充実している様子が見られた。また、就業意識の点で、実習を通して、教員の魅力ややりがいについては大きな変化は認められなかった。なお、実習を通して自身の課題が明確となったことで、自らの教員としての資質や能力に不安が生じる学生が少なからず見られたことから、充実した実習前の学習（指導案に関する指導が不足しているとの回答があった）や実習後のサポート体制、意識付けが、また主免実習生に対しては、より具体的な教科指導や児童生徒の見取る方法などを伝える学部の教育活動が重要であることが見いだされた。

表 25. 教職への志望意識について（人数）

	事前	事後
強く希望	5	8
希望	7	望んでいる
思案中	1	どちらかといえば望んでいる
あまり希望しない	1	どちらかといえば望んでいない
まったく希望しない	2	望んでいない

表 26. 心身の準備について（人数）

	事前	事後
できた	5	6
どちらかというどできた	8	7
どちらかというどできなかった	2	3
できなかった	1	0

表 27. 授業の準備【指導案】（人数）

	事前	事後
できた	1	9
どちらかというどできた	5	7
どちらかというどできなかった	10	0
できなかった	0	0

表 28. 授業の準備【教材】（人数）

	事前	事後
できた	0	9
どちらかというどできた	1	7
どちらかというどできなかった	4	0
できなかった	11	0

表 29. 実習期間中の質問（人数）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
できた	11	12	5	8	6	7	4	3	5	5	8	4	8	10
どちらかというどできた	4	4	8	8	8	9	9	9	9	10	6	12	7	5
どちらかというどできなかった	1	0	3	0	2	0	2	4	2	1	2	0	1	1
できなかった	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

表 30. 基礎・基本的知識・技能（人数）

	事前	事後
十分ある	0	0
かなりある	1	5
あまりない	15	11
ない	0	0

表 31. 指導力について（人数）

	事後
十分ある	0
かなりある	4
あまりない	12
ない	0

表 32. 事前相談について（人数）

	事前
相談した	1
したくてもできなかった	1
必要なかった	14

3.5 コロナ禍におけるオンライン授業等への対応について

令和2年度より新型コロナウイルス禍の中での教育実習実施を余儀なくされ、実習期間中の附属学校での授業状況にも様々な変更がもたらされたことから、令和3年度より、コロナ下での新規対応に関連するアンケート項目を設けた。

①実習期間中（土日祝日を含む）の新型コロナウイルス感染予防の対策について（図1）

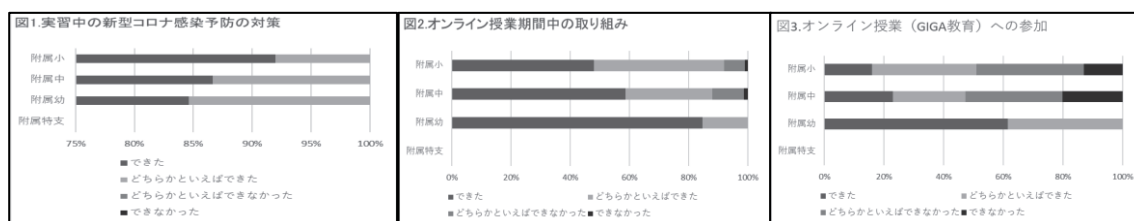
令和3年度の教育実習では、感染者が減少傾向にあった夏季休業期間中も、予防対策を緩和せず、実習開始前2週間の健康管理や行動制限を実習実施の条件として、県外出身者であっても実習開始2週間前からの長崎県内待機を課した。実習開始後も感染予防を徹底し、実習時間終了後に学生同士が自主的に集まり、授業の準備等を行うことも禁止としていた。こうした感染予防の対策について、各実習共に、100%の学生が「できた」または「どちらかといえばできた」と回答していた。

② 附属学校園でのオンライン授業期間中（動画配信を含む）の「教育実習」としての取り組みについて（図2）

令和3年度の教育実習では、実習開始後（新学期）の1週間を附属学校園でオンライン授業としており、通常通りの主免実習の実施ができなかった。附属小学校92%、附属中学校88%、附属幼稚園100%の実習生が、オンライン期間中も実習に取り組めたと回答していた。個別の記述回答を見ても、学校に児童や生徒がいない中のオンラインによる通常とは異なる授業を、新たな時代の学びの形としてとらえ、実習から多くを学び取っている様子が伺えた。そして、通常よりも実習時間に余裕が生まれることになったが、その時間を有効に活用し、対面授業開始後の教材準備や仲間同士で模擬授業を行い、実習担当教員から授業の話聞くなど、多くを学ぶ活動を行っていた。

③ オンライン授業の「取り組み」（GIGA教育など）への参加について（図3）

附属学校園では、実習開始後の1週間をオンライン授業で行っていた。附属学校園の教員にとっても、初めての試みであったが、オンライン授業にどの程度の参加が可能であったかの調査を行った。附属小学校51%、附属中学校48%、附属幼稚園100%の実習生が参加できたと回答している。個別の記述回答を見ると、大半の実習生が、オンライン授業を観察する中で、オンライン授業の難しさを感じたものの、担当する教員の工夫を実感した様子であった。ただし、直接画面を観察することができず、音声のみの授業観察となり、残念ながら児童・生徒の取り組みの姿や表情から、オンライン授業の効果や成果を学ぶことができなかった様子である。尚、附属幼稚園は、YouTube 動画によるオンデマンド教材の配信を行っており、教材作成に直接参加でき、多くを学べた様子である。



4. まとめと今後の課題

本報告書では、本学部の3年生を対象に実施したアンケート調査を分析し、各校種の主免実習の事前から事後における教員志望の意識の変化に重点をおいた分析を行い、以下のことがわかった。

令和2年度の主免実習では、「他人からうつされること」を考える学生が少なからずいたが、令和3年度の主免実習では、「他人にうつさないこと」を考えられる学生が多数を占め、主免実習後に行ったアンケートの新型コロナウイルスに関連する項目からも、感染予防対策への意識が行き届いている様子であった。感染者が減少傾向にあった夏季休業期間中でも、教育実習に関しては予防対策を緩和せず、実習開始前2週間の健康管理や行動制限を実習実施の条件として、県外出身者であっても実習開始2週間前からの長崎県内待機を課していた。しかし、学生からの不平や不満の意見はなく、実習後のアンケートでも、自身の行ってきた新型コロナウイルス対策について、100%の学生が「できた」または「どちらかといえばできた」と回答していた。また、実習開始後の1週間は附属学校園ではオンライン授業としており、通常通りの主免実習の実施ができなかったが、附属小学校92%、附属中学校88%、附属幼稚園100%の実習生が、オンライン期間中も実習に取り組めたと回答していた。個別の記述回答を見ても、学校に児童や生徒がいない中のオンラインによる通常とは異なる授業を、新たな時代の学びの形としてとらえ、実習から多くを学び取っている様子が窺えた。そして、通常よりも実習時間に余裕が生まれることになったが、その時間を有効に活用し、対面授業開始後の教材準備や仲間同士で模擬授業を行い、実習担当教員から授業の話聞くなど、多くを学び取る活動を行っていた。今年度の状況下でもウィズ・コロナへの対応が自然と取られており、有意義な教育実習になっていた。

令和3年度の小学校主免実習では、附属小学校の受入可能人数を超えた31人を公立学校で行うことになったが、2年次（前年）の蓄積実習（学習支援実習）との連携により、スムーズに全学生が公立校での実施できた。また、幼稚園主免実習でも3名の超過であったが、公立幼稚園との協議により問題なく実施できた。

主免実習前後での教員志望者の割合について、小学校では、64.7%が志望、23.5%が思案中であったが、79%へと志望が上昇した。中学校では、65.3%が志望、20%が思案中であったが、76%へと志望が上昇した。幼稚園では、53.8%が志望、26.9%が思案中であったが、69.2%へと志望が上昇した。但し、令和2年度の教員志望者割合（95.2%）と比較すると大きく減少している。特別支援学校では、75%が志望し、6.3%が思案中であったが、75%と同数の志望であった。

教員志望者の全体的な割合としては、主免実習前に64.4%が志望、21.5%が思案中であったが、実習後、76.5%へと志望が上昇した。教員への志望をしていない学生では、実習前の14.2%から、実習後に23.5%へと増加を示しており、思案中の学生に対し、教職への意欲を高める指導が必要であることが分かった。

今後もウィズ・コロナの状況が続く、困難さのある教育実習ではあるが、全教員が協力し、附属教員とも連携し、指導体制の更なる強化が求められている。

謝辞 本報告書の調査にあたり、本学附属学校園の協力を得た。